

Vol.19

テクノロジーと法の未来へ

FACULTY OF
GLOBAL INFORMATICS

国際社会が抱える問題を「情報の仕組み」と「情報の法学」の視点で
分析・解明し、解決策を論理的に構築する、ITL独自の学びに迫ります。

ITO
MIYU

埋もれた声を聞く ジャーナリストをめざして

国際情報学部国際情報学科4年／私立校の聖母学院高等学校（福島県）出身

伊藤 光雪（いとう みゆ）

はじめに

私は国際情報学部の中では、異端な学生かもしれません。プログラミング、情報法、DX……、そんな先端的な言葉が行き交う中で、私がこの学部で究めたいと思ったもの、それは「ジャーナリズム」でした。ジャーナリズムの何が私を魅了したのか、活動歴とともに紹介します。

「特攻と中央大学」の調査

大学1年次の12月、私はFLPジャーナリズムプログラム松野良一ゼミに参加しました。コロナ禍でのゼミ活動。オンラインで制作会議を重ねる日々が続きました。そこで同じゼミの同期で取り組んでいたのが、特攻隊員として亡くなった中央大学出身の方々の調査でした。中央大学戦没者名簿と書籍『特別攻撃隊全史』に記された名簿とを一つ一つ照合し、手作業で確認し続けました。その一人であり、中央大学専門部商科夜間部に

学んだ東京都出身の富澤健児さん。我々と同世代で特攻隊員として亡くなった彼は、どんな人生を歩んだのか、興味を持ち調査を始めました。

手掛かりは、中央大学に保管されていた戦没者名簿に書かれた名前・戦没日・出身学部の一行のみでした。図書館や駐屯地に足を運び資料を読み込んで、判明するのは戦歴のみ。彼の人柄を知るには、遺族に話を聞くしかないと考えました。約30年前に出版された特攻に関する本に記載された、遺族関係者住所に電話をかけるもつながりません。手紙を書くも、返事を得られず。八方塞がりの状態で、私は本に記載されていた遺族の住所を直接訪ねました。しかし、遺族はすでに引っ越されており、「ついにここまでか」と肩を落しました。それでも「知っている人がいるかもしれない」と近所の方々を尋ね歩きました。そこでご遺族と以前一度だけ電話した人物に出会い、ついに富澤少尉のご遺族を紹介し

てもらうことができました。そして、甥っ子さんのお宅を訪問し、富澤さん直筆の日記12冊を発見しました。

「昭和16年（1941年）4月16日（水）晴 入学式に出席す。今日から中大の学生なり」

「10月1日（木）晴 英語試験。廣い55号室に先生一人なのでカンニング夥し。だが俺は正々堂々と書いた。何とか書ける……」

そこには、大学生の日常が綴られています。彼も私と同じ、一人の大学生だったのです。日記を読んで初めて気付きました。この日記が書かれた時、まだ大学生である自分自身が特攻隊員となつて散っていくなど思いもしなかっただろう、と。

「1945年4月6日、特攻隊員として沖縄方面に出撃する」

遺書には、こうしたためてありました。「お父さんお母さん。ほめてやって下さい。弟よ妹よ、お父さんお母さんを大事にしてあげて下さい。お兄さんは死なな



1



2



3



1 特攻隊員として亡くなった富澤健児さん 2 富澤少尉のご遺族宅で写真や遺品を調査する筆者
3 福島県双葉町にある調査の発端となった建物 4 マリンハウスふたばで、当時管理業務をしていた方に話を聞く筆者（左）

い。遠い南西諸島の空よりきつときつと皆さまを護っています。この体體は死んでもきつとお護りいたします」
23歳の若さで、彼は沖縄の海に沈んでいきました。その無念さを、私は心から感じました。平和なときこそ、戦争の記憶を掘り起こし記録し後世につなぐ役割を、ジャーナリズムが担わなければならぬ。そう強く感じるようになりました。活動を通じ、自分自身の手で知られざる事実を掘り起こす面白さを学びました。彼の23年間の人生を、映像作品と執筆作品に残すべく作業を進めています。

i-TL先端的プロジェクト奨学金 と震災遺構

学部から「i-TL先端的プロジェクト奨学金」をいただき松野ゼミで取り組んでいるのは、「震災遺構」の調査です。福島県出身の私は、いまだ被災した当時の姿のまま残されている同県浪江町と双葉町の建物（震災遺構）に興味を持ちました。双葉町では海水浴場の施設であった「マリンハウスふたば」、子どもたちや先生全員が裏山に逃げて助かった「請戸小学校」など4カ所を訪れ、関係者の方々にお話を伺いました。皆さん、「建物を失ったことよりも、近所の方々や友人とのつながりを失ったことが悲しい」と語

り、「人とのつながり」こそ津波・原発事故で奪われたものだのだと知りました。そして、「見過ごされてきた人々の声」を拾うことこそジャーナリズムの重要な役割であると痛感しました。

私のこれから

国際情報学部では、情報法やプログラミング、AI技術などを学びつつも、自分自身の興味のあるテーマを追究できます。卒業したらジャーナリストとして、一つでも多くの埋もれている社会問題や見過ごされている人々の声を拾い伝えていきたいと考えています。